

いの流水俳壇

間 浩太選

今月の句会として楳本神社（いの大國様）への献詠俳句大会を実施しました。投句は四句で、二句は楳本神社に關係したもので、大國新聞に掲載されます。二句は当季雜詠で、うち一句ずつ「いの広報」に掲載されます。

大根蒔き安堵のあとの酒一合

井上 郁子

（評）春蒔きもあるが九月ごろに多く種蒔きされている。日常の野菜として欠かせぬものの一つであり、家庭菜園としていつ大根の種蒔きをしようかと思いつつ肥料を入れ畑作りをするのであるが、今年は酷暑が続いて種蒔きの日を迷ったものです。この句作者はご夫婦でやっと種蒔きが終わったのでほっとされたのでしょう。

種蒔きが終わると吹く風にも秋の気配が感じられ、平常には飲酒はしないのですが、今日は、ご夫婦で晩酌されたとのこと、睦まじい状況が目には浮かびます。酒一合の下句がよく効いていると感じました。

秋雨へ噴水独り芝居する

竹崎たかひろ

（評）公園や庭園の一種の装飾であり、宙

に噴き上がる水、落下する水、ときには淡い虹を描いて見ていて飽きない。噴水は歳時記では夏の季語であるが、四季を問わない。

秋雨のときの噴水は見る人も少なく、降る雨水、噴き上がる水の交錯もあまり美的効果はないが噴水は無心に變化しつつ秋雨へ向かって噴き上がっている。句作者はこれを噴水の一人芝居と観たのでしようか。面白く、楽しい見方で、句会でも多くの人が共感をしていました。季語が二つありますが、秋雨が大きな季語でありますので、まあ、かまわないでしよう。秋の季語と夏の季語があるのは避けた方がよい。

安らぎにある寂しさと秋の風

大川 節弥

（評）秋の風は西南から西へまわって、日々冷気を加えていく。身に泌みて、そこはかとなく哀れをそそるし、秋風を詠んだ古人の句歌は非常に多い。秋風を安らぎのあると、詠んだ句歌は少ない（各種の歳時記を見て）。

作句者は秋風は、秋も最中のそれではなく、立秋を過ぎたばかりの、まだ暑気の倦んでいるころの、ふっとした時にしのびよるように吹きよせてくる風の感触を言ったもので、顔に手足にふと触れて過ぎ去る一そよぎは、秋の気を感じさせて心が安らぎ癒やされるが、また一抹の寂しさも感じる作者であると思いました。作者の繊細な感受性を感じました。

そくばくの風をさがして秋の蝶 岡本とも子
秋刀魚焼き大吟醸を愛でる宵 岡村 嘉夫
虫を聞く心にゆとり生まれけり 小野川町子
黒鯉の王者の泳ぎ川統ぶる 片岡 包女
岩清水和紙の町まで一途なる 川村 博子
コスモスの風呼ぶ丈となりけり 刈谷 志津
夕闇になお鳴き急ぐ法師蟬 鎌倉 隆一
帯に挿す携帯電話秋扇 佐々 誠也
我が胸のあたり鬼の子風となる 島村かりん
爽やかな靈氣纏いて宮の句座 竹崎 光子
もろもろの揺ゆるみゆく喜寿の秋 田薦恵美子
語り合ふ姉妹揃ひて暮參かな 鎮西 美緒
秋あかね大型トラの道の駅 筒井 正子
湯上りの肌に泌みいる虫時雨 友草 水月
稲の出来ほめつつ風の渡りゆく 間 浩太
鱸現れし大鯉一尾秋の声 橋本 幸明
水べりやばたりと蟬のいない夜 東谷 晴男
夏休富士山からの便りまつ 弘瀬うき子
秋蟬や漢字ばかりの神の札 松尾満津於
赤とんぼ川面に映る沈下橋 森岡 照月
綿虫のふわりと何処へゆくのやら 森元二美子

投句先

社会教育課

いの町3597

電話 893-2012

次 題 「当季雜詠」五句
締め切り 毎月五日

今月のことも川柳

かき氷 あたまキンキン 舌まつ赤

川内小6年 西森 優人
（評）そうだそうだね。感じたことを感じたままに言い表すところが大事。「あたまキンキン」子どもの素直な気持ち「舌まつ赤」に満足感。子どもらしさが溢れ出ています。

わたし無視 今日もけんかの 兄妹

川内小5年 矢野 朋花
（評）今の世に兄妹げんかのできることがしあわせ。けんかの中で痛さもやさしさも育ってきます。兄妹仲よくけんかしながら育つ、いいことですね。

旅の宿 オートロックで 閉めだされ

川内小6年 竹倉 秀太
夏休み 家ぞくみんなを すいかわり
川内小2年 筒井 咲希
あひ日が まい日づく せみも鳴く
川内小2年 筒井 咲希
夏休み よそらにドーン 花火だね
川内小2年 筒井 咲希
おじちゃん いまはかみより 歯がはし
川内小5年 宮川 昌牛
にと川 きょうもさらさら かがやくよ
川内小3年 三谷けん太
台風が おこってくるのは なせだろう
川内小4年 古谷きらり
たなはたは ねがいをこめて つるすんだ
川内小3年 西村ひまり

※「こども川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。次回提出締め切りは11月21日（月）です。たくさんの皆さんの応募をお待ちしています。（応募は各小学校を通じてお願いします。）
※選評は、川柳連会の皆さんにお願ひしています。